

## 「カエル」とは何か：フリウリ語の例より

山本真司 Shinji YAMAMOTO

0. はじめに 生物の分類・命名は、言語研究でもよく取り上げられるテーマであり、とりわけ、昔から続く広義の辞書の・語彙記述的な作業やより近代の地理言語学や方言学が、博物学や生物学と並んで、生物界の現実を分類・命名し、言語外現実と名称との対応を定める作業を行なってきた。

本稿では、フリウリ語から、ささやかながら、そのような命名・分類の一例を（必要に応じてイタリア語や学名も参照しつつ）論じてみたい。取り上げるのは、「カエル」<sup>1)</sup>（両生類無尾目<sup>2)</sup>の動物）を示す様々な表現（主に単語、一部は複合語）である。カエルは世界中に広く分布しており、人間にとっても馴染みの深い動物であるので、言語の観点からの研究とも親和性が高いと言えよう。

と同時に、分類・命名の問題に関しても、言語研究と生物学とでは、当然、関心が異なる場合もあるので、その点にも注意していきたいと思う。

なお、本稿では、主に、フリウリ地方に生息する種類のカエルを話題にする。これは、言うまでもなく、フリウリ語は、とりわけフリウリ地方の伝統的現実を表現するために用いられてきた言語である、という点を優先的に考慮してのことである。

1. 依拠するべき資料：言語研究の側から まず、本稿のような考察がどのような研究の伝統の流れを汲んでいるかを、簡単に見ておく。その創始者としてまず名前を挙げるべきなのは、ピローナ Giulio Andrea PIRONA (1822-1895)であろう。彼の名は、文献学ではフリウリ語辞典 *Vocabolario Pirona* 別称 *Vecchio Pirona* 「旧ピローナ」の著者・編者としてよく知られているが<sup>3)</sup>、フリウリの動物相・植物相の著名な研究者でもあった。「イタリア両生類・爬虫類学会」*Societas Herpetologica Italica* (SHI) も、「イタリアの両生類・爬虫類地図」*Atlante degli anfibi e dei rettili d'Italia* (SHI 2009) の中で (p.61) 彼の名を挙げている。これは、フリウリでも、生物学研究と言語研究の接点が各所で見られることの一例である。SHI 2009 が同時に挙げている (p.61) テッリーニ Achille TELLINI (1866-1938) も、フリウリ語・エスペラント語による執筆家でもあった。

ピローナの辞書に改定・補筆を加えたのが、「フリウリ文献学会」*Società Filologica Friulana* (SFF) のフリウリ語辞典「新ピローナ」*Nuovo Pirona* (以後、NP) である。NP は、時代的・方法論的制約にもかかわらず、版を重ねつつ 1990 年代に至り、その後様々な辞書の出版後も、辞書というよりむしろ事典的な教養の書として、今日まで読まれ続けてきている。

SFF との関連で、少なくとももう 1 つ述べておくべきなのは、この会のおかげで、フリウリは充実した言語地図を持っていることである。これは、「イタリア言語地図」*Atlante Linguistico Italiano* (ALI) のプロジェクトとして始まり、後に、「フリウリ歴史言語民族地図」*Atlante Storico Linguistico Etnografico Friulano* (ASLEF) として完成を見たものである。<sup>4)</sup> 言うまでもなく、動・植物に関する表

現も多く含んでいる。ただし、資料の豊富さの点からは、言語地図のほうが勝っていることが予想できるにもかかわらず、本稿では、後に述べる事情により、主な資料としては、辞書 NP を用いることとし、言語地図は、必要に応じて参照するにとどめる。

2. NP による「カエル」 まず、辞書 NP から、フリウリ語で「カエル」を示すと思われる単語を引き出して列挙してみよう。この辞書は、同義語・類義語の相互参照が結構豊かで、それを辿っていくと少なくともこれほどの数の語が見つかる。今回は、フリウリでも日常的によく目にする・耳にするとと思われる *crot*<sup>5)</sup> という語を出発点とした（勿論、他の単語でも良かったに違いないが）。なお、このリストでの綴りは、NP のままなので、標準化正書法とは幾分異なる。特に、標準化正書法の  $\zeta = NP$  の *zz* に注意。ただし、慣習に従い、アクセント符号は簡略化した（イタリア語の場合と同様）。

*crot, rane, 'save, pissargot, pissoc, candul, cavriole, crazzule, baracule, barascule, racule, scrazzule, scarazzule, carazzule, scjarazzule, muc, muca, muchel, crota, campanel, 'sâf, rosp, raspat, raspatat, bavôs, malôs, farza* (リスト1)

このリストは、1つの言語圏における多様性という見方からは、極めて多彩とも言えず逆に極端に単純でもないが、これくらいは出てきても不思議ではないという印象を与えるであろう。あるいはもっと多数多様なものが出てきても不思議ではない、とさえ思えるかもしれない。ただ、(二次的な移民によるものを除いた) 本来のフリウリ語圏としてのフリウリ地方の面積が、大まかな目安として言えば、だいたい静岡県ほどであることを思えば、このリストの単語も、結構な数であるとも見える。

実は、この「カエル」のリストは、フリウリ語圏の多様性を十分に表わしているとは言えない。ここには、既にある種の簡略化が行われているのである。例えば、以下のような点である。

- ・このリストには、規則的な等語線にかかわる方言変異形は必ずしも明示的に記載されていない。例えば、-Aの結果による等語線 (-A > -e, -a, -o, -ə) を考えると *rane, rana, etc.* のように複数の形が想定されるケースも、1つの形 *rane* (中部方言形) で代表させている。

- ・縮小辞などの評価辞の付加による派生形は、必ずしも載せられていない。例えば縮小辞 -*ut* による派生形 (*crot / crotut* のように) は、規則的・生産的であるが<sup>6)</sup> (いや、むしろ、生産的であるからこそ、であろうか)、NP は、*crotut* のような例外 (たまたま掲載?) を別にすれば、多くの -*ut* 形は載せていない。<sup>7)</sup>

- ・合成語・複合語はここでは取り上げられていない。複合語的表現の一部として使われる要素は、しばしば、元来とは違った意味を持つに至るので (例えば、*crot malôs* は「ガマガエルの一種」であり、*crot* の一種ではなく、むしろ 'save 「様々な種類のガマガエル」に近いように見える)、扱いに問題が起こる。この問題は、後ほど、改めて取り上げる。

要するに、ここで取り上げられているリストは、共通体系的な観点から、語彙素を抽出するのを目

的としていて、それらが具体的に取るさまざまな形態を逐一拾い上げることを目的としてはいない、と言えるであろう。言語地図・方言地図は、通常、まさにこのような形態の変異を拾い上げることも重要な役割としているので、このリストは、最初からそのような複雑さを切り捨てたうえで成り立っているのだということを了解しておかなければならない。

言語地図を用いて資料整理の作業をスクラッチから行うとすれば膨大な作業を必要とするであろうが、今直ちにはそれを実現するのは困難であるから、今回は NP のような辞書を用い、まずは規模に限った概観的な研究を行なうことにしよう — より詳細な研究は将来に期待するとして。

3. 類語・同義語関係による分類 さらに、そのような単純化を施してもなお、「カエル」のリストがこれだけの長さになるもう1つの重要な理由がある。それは、ヨーロッパの幾つかの言語のように、フリウリ語でも、実は、カエルの種類ごとに名称の使い分けを行なっているようだ、ということである。この使い分けは、日本語が「カエル」という語との組み合わせ「何々ガエル」で、さまざまな種類のカエルに名前を付けているのとは違って、1つ1つの種類ごとに、別の語彙素を用いた名前を付けるということである。例えば、英語は、カエルを、少なくとも frog 「普通のカエル」と toad 「ガマガエル」の2種類に呼び分けている。<sup>8)</sup> フリウリ語の場合は、このリストから予想する限りでは、もう少し複雑そうである。

もちろん、これらすべての単語がそれぞれ互いに全く違った意味を持っているとしたら、大変なことであるが、実際には、互いに似た意味の単語が幾つか存在していて、それらを同義語（あるいは準同義語）としてひとまとめにして考えると、幾つかのグループに分けることが可能であるように見える。そのような分類の方法は幾つか考えられるが、簡単なのは、NP の類義語・同義語の相互参照を辿っていくことである。すると、次のような少なくとも数個の語群に分けることが可能と思われる。なお、各語群の中のどの単語を代表として筆頭に置くかは、NP の見出し語の選択に加えて、特にファッジニ Giorgio FAGGIN (コイナーフリウリ語の基準について積極的な発言・介入を行なってきた研究者である) の辞書 Faggin (1986) (コイナーの一種の模範としてたびたび参照されてきた) を参考に決めてみた。なお、意味に疑問が残る語には、(?) を付してある。

(1) **crot** ただし、方言によっては、(2) を含む模様。

(2) **pissargot** pissoc, candul, cavriole, (?) rane,<sup>9)</sup> (?) rinele<sup>10)</sup>

(3) **craçule** baracule, barascule, racule, scrazzule, scarazzule, carazzule, sejarazzule, (?) ranute<sup>11)</sup>

(4) **muc** muca, muchel, crota

(5) **'save** campanel, sâf, rosp, raspat, raspatat, bavôs, farza

(6) **campanel** ただし、'save の 一種ともみなされる。

(リスト2)

それぞれ、どのようなカエルなのか、NP は、次のような説明をしている。

- (1) **crot** 「高地を除いて、フリウリの全土にいる」
- (2) **pissargot** 「夏になるといつも水の外、特にやや湿った牧場にいる。尻から刺激性の液体を放出し、その量は、ほかのカエルよりも多い。そのためこの名がついた …」
- (3) **craçule** 「雨が近づくと、木に登ってゲロゲロとなく」
- (4) **muc** 「笛を吹くような鳴き声のゆえによく知られている … また、民間ではドイツ人のあだ名」
- (5) **'save** 「さまざまな種類のガマガエル」として特に次の3種を挙げている。  
*Bufo vulgaris Laur.* 皮膚は、複数の隆起と疣でこぼこしており、色合いは灰色で黒ずんでいる。  
*Bufo viridis Laur.* 皮膚は白っぽい色でエメラルド色の斑点がある。  
*Bufo calamita Laur.* 前者より少し小さく、皮膚は、緑がかった灰色で、くすんだ色の斑点がある。
- (6) **campanel** 「'save のうち、*Bufo viridis Laur.* と *Bufo calamita Laur.* は、恐らく、小さな鐘 **campanella** を思わせるその鳴き声から、こう呼ばれる。」

カエルやフリウリについて詳しい知識を持つてはいなければ、この説明から伝わってくる情報は、ごく僅かであろう。もっとも、(3) などは、日本の文化における発想と共通していて分かりやすいようにも見える（「きゃあるがなくんであめずらよ」と歌う「茶つきり節」のように）。興味深いのは、(1)、(2)、(3)、(4) の記述には、それぞれのカエルの姿・形への言及が殆どないことである。これは、例えば、松井/関 2016 の「トノサマガエル」(p.115) などの記述と対照的である。

なお、(4) の「カエル」「ドイツ人」は、(語源的にはどうあれ話者の意識の中では) 多義語なのか同音異義語のケースなのか、簡単には判断し難い。また、(3) も、「カエル」の他に「ガラガラと音を出す楽器」(ラットル) の意味もあり、やはり多義語か同音異義語なのか解釈の問題が残る。

他方、これらの説明は、ある特定の種のカエルの生態と一致するようにも見え、フリウリを知っている人にとっては、なるほどと思わせる点もあることも否めないようである。例えば、(1) の説明は、*Rana esculenta* の分布 (SHI 2009, p.341) と、(2) の説明は、*Rana temporaria* の生態 (常に水辺にいるわけではない) と、合致する (SHI 2009, p.371) ようである。

いずれにせよ、何らかの方法で情報の客観性を担保する必要があるが、そのため、NP では、これらの「カエル」には、それぞれ、学名およびイタリア語訳が添えてあり、これにより、それぞれ、どういうカエルであるかがある程度わかる。それをまとめてみたのが (表 1) である。ただし、NP の刊行年 (初版 1935 年) 以降の生物学的な研究の結果により修正が必要になった点が幾つかあるので、修正された名称は別コラムに記し、主な修正点については、表下にまとめて簡単な説明を付しておいた (主に、AMNH, SEH, SHI などの web サイト、および SHI 2009 を参考にした)。日本にいる近縁種・属は、ほんの幾つかを挙げただけだが、主に、松井/関 2016 を参照した。また、ところどころ、イタリア語訳 (カッコ内) も付しておいたが、これはあくまでも大まかな参考と考えられたい。イタリア語の「カエル」の名称は、また色々な問題があり得るので、別の稿を要するテーマであろう。

フリウリ語名		NP による学名	以後の修正 (およびイタリア語訳との対比)	日本にいる近縁種・属
crot (rana)		<i>Rana esculenta</i>	<i>Pelophylax klepton esculentus</i> (rana verde)	<i>Pelophylax nigromaculatus</i> トノサマガエル
	pissargot	<i>Rana temporaria</i>	<i>Rana temporaria</i> (rana rossa)	<i>Rana japonica</i> ニホンアカガエル
craçule (raganella)		<i>Hyla viridis</i>	<i>Hyla arborea</i> (raganella)	<i>Hyla japonica</i> ニホンアマガエル
			<i>Hyla intermedia</i> (raganella)	
'save (rospo)		<i>Bufo vulgaris</i> Laur.	<i>Bufo bufo</i> (rospo)	<i>Bufo japonicus</i> ニホンヒキガエル
	campanel	<i>Bufo viridis</i> Laur. <i>Bufo viridis</i> Laur. var. <i>calamita</i>	<i>Bufo viridis</i> (rospo smeradino) <i>Epidalea calamita</i>	
muc (ululone)		<i>Bombinator igneus</i> Merr. <i>Bombinator pachypus</i> Fitz.	<i>Bombina variegata</i> (ululone dal ventre giallo)	<i>Bombina</i> スズガエル 日本には生息せず。

(表 1)

- ・従来は、多くの種が *Rana* に割り振られていたのだが、研究が進むにつれ、より細かな分類が適切であるという事で、多くの種は *Rana* から別の属に移動させられ、あるいは、独立の別の属とされることになった。例えば、*Rana esculenta* (また rana verde 一般) も、*Rana* ではなく、*Pelophylax* という属の、*P.kl. esculentus* になった (松井 / 関 2016, p.113 参照)。同様なことは、*Bufo* にも生じている。例えば、*Epidalea calamita* ← *Bufo calamita*
- ・*Pelophylax* の分類は、度々、議論的となってきた (SHI 2009, pp.334-339)。その結果、*P. esculentus* は、*P. lessonae* と *P. ridibundus* の雑種 (klepton:元の種に繁殖を依存する雑種) であると判明した (SHI 2009, p.342)。
- ・*Hyla viridis* は、現在では *Hyla arborea* のシノニム (異名) とされている。フリウリには、*Hyla* は、*H. arborea* と *H. intermedia* の両方が生息している (SHI 2009, p.313, 319) が、前者は分布地域がごく限られている。
- ・*Bombina* (ululone) については、一時期、アペニン山脈以南にいるのが *Bombina pachypus* で、フリウリなどイタリア北東部にいるのは、*Bombina variegata* であるとされていた。だが、近年の分子生物学的研究の結果、*Bombina pachypus* は *Bombina variegata* と同種であると判断された (SEH による分布図 *Bombina variegata* を参照)。
- ・*Epidalea calamita* は、イタリアには生息していない (SEH による分布図を参照)。NP に載っている理由は不明。

4. 通称と学名との照合の問題点 ただ、学名とフリウリ語の通称とを照合して考えるのは、ある意味とても便利であるが、両者はあくまでも別物なので、そのような照合は、便宜的とまでは言わないにしろ、あくまでも留保付きで考えねばならないものである。以下のような問題点は、自明すぎるためか、いちいち指摘されることも少ないが、方法論的制約の問題として留意しておく必要がある。

(1) 仕組みと根拠の違い 学名が、その生物の自然科学的な特徴の厳密な分析に依拠しているのに対して、伝統的な名称は、その対象が、当該文化の中で持ってきた文化的・社会的地位・役割と結びついていることは容易に想像がつく(とは言え、厳密に言えば、学問も文化の産物であり、その生まれた文化的環境と無縁ではなく、*esculentus*「おいしい」という学名—当然、カエルを食べる習慣と関係しているであろう—も、その好例)。あるいは、前者は基本的に古典的カテゴリーライゼーションの問題であるのに対し、後者は、原型論など、様々な可能性に開いているとも言えよう。両者は、違った動機・目的によって成立しているもので、それが必ず符合するという保証はない。なので、例えば、生物学的には異なっている複数の種が、文化的には同類とみなされても、不思議ではないであろう。

(2) 安定性の問題 既に見たように、研究の進歩に伴って、学名は、比較的短い期間のうちに変更を余儀なくされることも多い。それに対して、通称は、長い伝統のなかで根付いてきたもので、その社会の文化的都合に合わされて使用されてきた、簡単に変更が効かないものであることが予想される。

(3) 取り上げられていないカエル フリウリに生息しているのにここに取り上げられていない種が幾つかあるようである。例えば *Pelobates fuscus* (SHI 2009, pp.292-297), *Rana dalmatina* (SHI 2009, pp.352-357), *Rana latastei* (SHI 2009, pp.362-367), など。調査の不備でなければ、これらの種は、様々な事情で、フリウリ語話者があまり意識していないと推測される。あまり頻繁には見かけない、人間との関わりが薄い(例えば「食べられない」から)、よく似た別種と混同されている、など。

5. 総称としての「カエル」 ところで、この表には、特に日本語話者の感覚からすればやや居心地が悪いと思われる点がある。それは、総称としての「カエル」に当たる語がないことである<sup>12)</sup>。

イタリア語では、カエルの総称として *batrace* とする語(語形が安定しなかったら、*batrace*, *batracio*, *batraco* と、語末が様々な形で現れる。Lo Zingarelli 1996, p.206 参照)があるが、古語・雅語であり、日常会話では用いないらしい。<sup>13)</sup> そのため、現代語で「カエル」を正確に指し示すには、生物学の用語で「両生類無尾目の動物」(*animale anfibio anuro*) とするしかないようである。

フリウリ語でも、やはり、もともと総称としての「カエル」は存在しないようである。もともと、イタリア語とフリウリ語との密接な関係から、前者から後者への借用あるいは敷き写し(*anuro* > *anûr*) は容易なので、<sup>14)</sup> 上述のような言い方がイタリア語で可能ならフリウリ語でも可能であるとは言える。また、近年試みられているフリウリ語の「近代化」の一環として、従来はフリウリ語には欠けていた科学用語などを補う試みもあり、<sup>15)</sup> その範囲では、当然「両生類無尾目の動物」に相当する言い方も存在するであろう。だが、それが普通の日常会話でも使われるかは別問題である。

フリウリ語の「カエル」の状況は、現実をどのように分割・分類して説明する方法が、往々にして、ある言語と別の言語では異なる、という問題を指摘した、いわゆる「サピア=ウォーフの仮説」の例証の1つと言えるかもしれない。例えば、その関連でよく取り上げられる「雪」を表わすエスキモー語の諸表現の例などに倣って説明すると、「フリウリ語では、(日本語のような)総称として「カエル」を表わす語がなく、代わりに、「カエル」を細分化した名称が複数個存在している。日本語では、初めに「カエル」があって、それを細分化しているのだが、フリウリ語では初めから別個に分けられている。つまり、(フリウリ語の様々な「カエル」を表す語これらの名称の間に、必ずしも互いに音声の類似がないことからわかるように)、この言語では、(日本語のようにトノサマガエル、アマガエル、ガマガエルといったように、「カエル」に付加的な形容を付けて二次的に細分化しているのではなく)、それぞれ全く別物として捉えて名前を付ける、最初からの類別化・範疇化を行なっている」、とすることになる。<sup>16)</sup>

ただし、これは、言語表現の上に現れた限りのことであって、そのような類別化・範疇化が話者の認識全般を支配しているのかについては、周知のとおり批判も多く、この「カエル」の場合も、慎重に判断しなければならないであろう。

6. 「カエル」のプロトタイプは? では、別の観点から考えてみよう。例えば、フリウリ語の「カエル」を表す諸語(およびその概念)は、言語のシステムの中で、全く個々バラバラに存在しているのではなく、相互に類似しているものとして、何らかの形で1つのグループに纏められている、と仮定するとどうであろうか。

もちろん、話者がどのように感じているかを知る、あるいは、話者の頭の中を知ろうとする試みは容易ではないし、ある意味で本稿の趣旨を超える問題である。しかし、もしそのような前提で論ずるとすると、可能なモデルが幾通りかあり得るだろう。そのうちの1つとして、認知言語学の「原型理論」のような、「原型」prototipoあるいは「典型」を想定し、それを基準に「カエル」とは何か、および、より「カエル」らしいものはどれか、を見定めていく、という論法が考えられるだろう。<sup>17)</sup>

その場合、フリウリ語の「カエル」の原型の候補として有力だと思われるのは、おそらく crot ではなかろうか。NPの「フリウリの全土にいる」という説明や、SEH, SHIによる *Rana* や *Pelophylax* 諸種の分布地図を見ると、crot という語で指示される諸種が、フリウリ語話者にとって、カエルの中でも比較的身近なものであることは確かなようである。そのため、これらが「カエル」の典型(あるいはそれに近い「カエル」)と感じられても不思議ではなさそうである。

crot が「カエル」の代表選手の地位を獲得しつつあるのではと思わせる現象を、もう1つ、言語の観点からも、挙げておきたい。それは、複合語形成の傾向である。ある種の「カエル」を、1語で言い表わす代わりに、crot を使った分析的・複合的表現を使うのである。この場合、その意味する対象は必ずしも本来の crot ではない。crot di rosade (rosade「露」) = pissargot (この場合は crot の一種と

も考えられる), crot di San Pieri (San Pieri 「聖ペテロ」) = crot di rosade, crot malôs = 'save. これらの場合, crot は, 一般的な「カエル」の概念により近づいているのではないだろうか. ただし, このような複合語がどれぐらいの方言に広がっているかはさらに調査が必要であろう.

7. 最後に 今回出来上がった「カエル」の一覧は, 多少ともコイネーの伝統に沿ったものであり, もしうまくできていれば, フリウリ語話者の多数に困難なく許容されるはずである. と同時に, フリウリ語には顕著な地域差もある (とは言えフリウリ語では方言差が相互理解を妨げることはめったにない) ので, その点からの検証もなければ, 今回のような研究は完結できないところである. だが, それは一人の研究者の手には余る膨大な作業を要することは容易に想像がつく.

さらに, 環境破壊によるカエルの衰退, フリウリ語話者の減少, そして社会における人間とカエルの関係の希薄化, など, NP や ASLEF が作られた頃と比べて状況は変化しつつある. 当時と同じ状況を知る手掛かりはますます少なくなっているという意味で, 研究者に許されている時間的猶予は, あまり長くはなさそうである.

主な参考文献

・紙媒体による文献

*Atlante degli anfibi e dei rettili d'Italia / Atlas of Italian amphibians and reptiles*. Societas Herpetologica Italica (SHI), Edizioni Polistampa. Firenze II edizione: luglio 2009 /2nd edition: July 2009.

FAGGIN, Giorgio, *Vocabolario della lingua friulana*, Udine, Del Bianco editore, 1985.

PELLEGRINI, Giovan Battista, *Introduzione all'Atlante storico-linguistico-etnografico friulano (ASLEF)*, Istituto di glottologia dell'Università di Padova, 1972.

PIRONA, Giulio Andrea / CARLETTI, Ercole / CORGNALI, Giov. Batt., *Il nuovo Pirona: vocabolario friulano*. Udine, Società filologica friulana, 2a edizione, 1992. Aggiunte e correzioni riordinate da Giovanni Frau. [初版は 1935 年]

VANELLI, Laura, *La fonologia dei prestiti in friulano*, in Günter Holtus; Kurt Ringger; W Theodor Elwert, *Raetia antiqua et moderna: W. Theodor Elwert zum 80. Geburtstag*, Tübingen, M. Niemeyer, 1986.

*Lo Zingarell. Vocabolario della lingua italiana di Nicola Zingarelli*, Bologna, Zanichelli, 12a edizione, 1996.

松井正文著 / 関慎太郎 写真「日本のカエル分類と生活史 ～全種の生態, 卵, オタマジャクシ～」誠文堂新光社 2016 年

宮岡 伯人「言語の違い, 認識のちがい」, 宮岡 伯人 (編)「今, 世界のことが危ない! -グローバル化少数者の言語-」: 2005 第 19 回「大学と科学」公開シンポジウム講演収録集 東京 クバプロ 2006 年, pp. 43-49.

宮岡 伯人「エスキモー — 極北の文化誌」岩波新書 1987 年



・ Web サイト [最終確認は 2017 年 10 月 17 日]

*Amphibian Species of the World 6. 0, an Online Reference. American Museum of Natural History (AMNH)*

<http://research.amnh.org/vz/herpetology/amphibia/>

*Atlas of amphibians and reptiles in Europe*

[http://www.seh-herpetology.org/Distribution\\_Atlas/Distribution\\_Atlas](http://www.seh-herpetology.org/Distribution_Atlas/Distribution_Atlas)

*Societas Europaea Herpetologica (SEH)* <http://www.seh-herpetology.org/SEH/About-the-Society>

*Societas Herpetologica Italica (SHI)* <http://www-3.unipv.it/webshi/welcome.htm>

「日本語地図」第 5 集第 218 図 かえる (蛙) [http://www.ninjal.ac.jp/s\\_data/drep/laj\\_map/LAJ\\_218.pdf](http://www.ninjal.ac.jp/s_data/drep/laj_map/LAJ_218.pdf)

同 第 219 図 ひきがえる その 1 [http://www.ninjal.ac.jp/s\\_data/drep/laj\\_map/LAJ\\_219.pdf](http://www.ninjal.ac.jp/s_data/drep/laj_map/LAJ_219.pdf)

同 第 220 図 ひきがえる その 2 [http://www.ninjal.ac.jp/s\\_data/drep/laj\\_map/LAJ\\_220.pdf](http://www.ninjal.ac.jp/s_data/drep/laj_map/LAJ_220.pdf)

・ オンラインで参照した論文 [最終確認は 2017 年 10 月 17 日]

CROTTINI, Angelica / ANDREONE, Franco, *Conservazione di un anfibio iconico: lo status di Pelobates fuscus in Italia e linee guida d'azione*, Quad. Staz. Ecol. civ. Mus. St. nat. Ferrara, 17: pp. 67-76, 2007.

[http://www.francoandreone.it/docs/Crottini\\_Andreone\\_Pelobates\\_iconico.pdf](http://www.francoandreone.it/docs/Crottini_Andreone_Pelobates_iconico.pdf)

ROSCH, Eleanor, *Principles of Categorization*, University of California, Berkeley, 1978.

[http://commonweb.unifr.ch/artsdean/pub/gestens/f/as/files/4610/9778\\_083247.pdf](http://commonweb.unifr.ch/artsdean/pub/gestens/f/as/files/4610/9778_083247.pdf)

・ 映像・音響資料 [最終確認は 2017 年 10 月 17 日]

*Anfibi anuri italiani* <https://www.youtube.com/watch?v=U2ckCJwIRc0>

*La zoologia ... con Dave.*

*La Rana verde maggiore. Pelophylax ridibundus.* <https://www.youtube.com/watch?v=UQCmAT-avCg>

*La Rana temporaria. Rana temporaria* <https://www.youtube.com/watch?v=lGeh2V7Z-gk>

*L'ululone dal ventre giallo. Bombina variegata* <https://www.youtube.com/watch?v=ky1n-NZj2nk>

*Il rospo comune. Bufo bufo* <https://www.youtube.com/watch?v=0lmyyFC2K6g>

注)

1) 本稿では概念・単語を問題にする時には括弧付きで「カエル」と、生物そのものを指す時には括弧無しでカエルとした。

2) 1988 年の文部省「学術用語集動物学編」以降、「カエル目」という名称が推奨されているが、後者を用いると文脈によってはトトロジエ的になるのを避けるため、また、学名 *Anura* の語源的意味「尾の無い」が伝わるようにという意図も込めて、本稿では、「無尾目」と言うことにする。

3) フリウリ語辞典 *Vocabolario Pirona* 別名「旧ピローナ」*Vecchio Pirona* の編者としてである。これは、彼のおじである修道院長ピローナ *abate Jacopo PIRONA* (1789 – 1870) の遺稿に、整理・加筆したものの。さらに、ジュリオの遺稿に、SFF のメンバーが加筆・修正を加えたのが、「新ピローナ」*Nuovo Pirona* (NP) である。

- 4) ALI は, SFF の会長も務めたペッリス Ugo PELLIS (1882 – 1943) を調査者とする. ASLEF はパドヴァ大学の歴史言語学教授ペッレグリーニ Giovan Battista PELLEGRINI (1921 – 2007) のグループが, ALI のフリウリに関する部分を抜き出し, それに新たな資料・調査を追加して完成させたもの.
- 5) 厳密な頻度数調査というよりも山本の現地滞在の体験から得た印象である. この *crot* は, 「カエル祭り」 *sagre* (あるいは *fieste*) *dai crots* (春から夏にかけて幾つかの市町村で行われる) というような祭りの名称にも使われ, その宣伝ポスターでもよく目にする.
- 6) *-ut* をめぐる意味論的および形態音韻論的問題については Vanelli 1986 が詳しい.
- 7) ただし, 次のようなものは単なる縮小形とは区別するべきであろう. *ranute*: 形の上では, *-ute* の付加による規則的な派生形だが, 意味は単なる縮小形ではなく (「小さな *rane*」ではない), 別の種類の「カエル」 (= *craçule* か?). *rinele*: *-ele* の付加による派生だが, 語幹母音の変化を伴っている (*rane* > *rin-*) 点で不規則的. 意味も, 単に「小さな *rane*」ではない可能性がある.
- 8) もう少し詳しく言うと, 場合によっては *frog* が「(toad も含む) カエル一般」の意味でも使えるようである. また, さらなる分類には, (日本語で「... ガエル」とするのと似て) *frog* を用いた複合語 (*tree frog* 「アマガエル」のように) を用いるのが一般的なようである.
- 9) *rane* に関する NP の説明は文意がやや曖昧なのだが, 一応, こう位置づけていると解釈しておく.
- 10) 11) 注 7) を参照.
- 12) これは, 先述の, 「種類ごとに使い分ける多数の名称がある」ということと, 関連はしているが, 別のことであることに注意.
- 13) この語は, 興味深いことに, NP では使用例がある. ”’Save ... Il girino: *cudul* come pure per gli altri *batraci*” (p.931) 「ガマガエル ... オタマジャクシは, 他のカエル類と同様, *cudul* と呼ぶ」.
- 14) イタリア語からの借用語の形態音韻論上の問題は, 先に挙げた Vanelli 1986 が詳しい.
- 15) コンソーシウム「*lenghe 2000*」や, フリウリ語で科学技術論文を書く「フリウリ科学技術学会」*Societât Sientifiche e Tecnologjiche furlane* の取組みなど. また, 現代的意味での本格的な辞書では「イタリア語=フリウリ語大辞典」*Grant Dizionari bilengâl talian-furlan* (紙媒体では 2011 年) などがある.
- 16) 「カニックは降っている雪, アニユは飲料水をつくるための雪, アプットは積もっている雪, プカックはきめ細かな雪, ペシュトックは吹雪, アウベックはイグルーを作るための切り出した雪です. これは, 初めに「ユキ」があつて, それを細分化しているのではなく, 初めから別個に分かれています. つまり, [これらの名称の間に] 互いに音声の類似がないことからわかるように, (細雪, どか雪, 粉雪といったように, 雪に形容詞を付けて二次的に細分化しているのではなく) それぞれ全く別物としてとらえられた, 最初からの類別化・範疇化なのです.」(宮岡 2006, p. 45, 46)
- 17) タイプ論の思想・方法論は幾つか種類があるが, ここでは言うまでもなく, 言語的なそれ, 例えば, Rosch 1987 など念頭に置いている.